

# 双生児の発達について

## —乳児期から12歳までの follow up—

国立精神衛生研究所 池田由子  
中川幸  
成田年重

### 〔まえがき〕

わが国では多胎（複産）児のうち、双胎（双生児）は分娩1,000について約6.4程度の割合で生まれ、その84%は2人とも生産である。妊娠期間は単生児より短かく（第10月単生児95.5%に対し79.4%）、出生時体重も2,000g台が70%、全体の56.1%は未熟児（単生児5.3%）といわれる。発達に関しては双生児は発達の上で12歳ではほぼ問題がなくなるという報告もある。われわれは昭和41年から千葉県の上野市に長期間追跡してきたが、今回は身体・精神発達の面で、幼児期、学童期を通してどのような発達の状況を示すかを検討した。

### 〔対象〕

当研究所に登録し資料を分析中の150組のうちから、乳児期（1歳）、幼児前期（3歳）、幼児後期（6歳）、学童前期（9歳）、学童後期（12歳）に身長・体重の計測と、

知能検査（田中ビネー及びWisc）を施行し、更に卵性診断と、医学検査がなされている71人（男31人、女40人）を対象とした。また研究班により親の養育態度はA・B・Cの3段階に分類されている。

71人は双生児の双方が未熟児である12組、25人（三つ子1組を含む）、一方が未熟児である12組、24人、双方が成熟児である11組、22人、計71人に分類される。彼らの出生時体重、妊娠週数は表1、表2に示す。

### 〔結果〕

#### （1）身体発達

男子、女子、未熟児、成熟児の4グループに分けて、身長・体重の発達をみると、1歳時には男・女の未熟児、男・成熟児の3者は体重で男・女の全国平均値を下まわりますが、女・成熟児のグループは平均値を越す。

身長は男・女未熟児は平均より下だが男・女成熟児は

表1 在胎週数

	32週	35週	36週	37週	38週	39週	40週	41週	計
2人とも未熟児のグループ	3		2	2	2	1	2		12組
1人だけ未熟児のグループ		1		1	1		9		12組
2人とも成熟児のグループ				2		2	6	1	11組

表2 出生時体重

2人とも未熟児のグループ	1,500~1,999g	14人
	2,000~2,499g	11人
1人が未熟児のグループ	1,500~1,999g	2人
	2,000~2,499g	10人
	2,500~2,999g	11人
	3,000~3,499g	1人
2人とも成熟児のグループ	2,500~2,999g	19人
	3,000~3,499g	2人
	3,500~3,999g	1人

表 3 幼児後期の知能指数分布

	測定 不能	IQ 1~25	26~50	51~80	81~100	101~120	121 以上	人数
2人とも未熟児のグループ	5人		2人		13人	3人	2人	25人*
1人だけ未熟児のグループ	6人		1人	3人	4人	7人	3人	24人
2人とも成熟児のグループ	8人			5人	5人	4人		22人
計	19人		3人	8人	22人	14人	5人	71人

\*12組の中に3つ児が1組入っているため25人となっている。

表 4 学童後期の知能指数分布

	測定 不能	IQ 1~25	26~50	51~80	81~100	101~120	121 以上	人数
2人とも未熟児のグループ	3人		1人	1人	7人	6人	7人	25人*
1人のみ未熟児のグループ	2人	1人	1人	1人	2人	8人	9人	24人
2人とも成熟児のグループ			1人	7人	3人	6人	5人	22人
計	5人	1人	3人	9人	12人	20人	21人	71人

\*12組の中に3つ児が1組入っているため25人となっている。

平均を上まわる。3歳時には男未熟児は体重・身長の方で平均より下だが、女の未熟児は身長のみ平均に達しない。個別に71人の経過を辿ると37人の未熟児は殆どが3歳まで体重、身長ともに平均に追いつくが、追いつけなかった体重で9%、身長で11%の児童も6歳前後には平均に達している。身体発達に関しては幼児前期を除いては親のケアの程度はあまり関係していないようである。

#### (2) 知能発達 (表3, 表4参照)

2人とも未熟児のグループ25人についてみると、幼児後期の平均IQ 80, 学童後期の平均IQ 99で3グループのうちもっとも低い。12歳時点で発達遅滞のあるものは5人で、うち3人は精神薄弱児施設、肢体不自由児施設に入所中である。5人のうち4人は一卵性双生児で、2人とも一致して遅滞を示している。のこりの1人は二卵性双生児の第2子で出生時体重(1,900g)は第1子(1,500g)より大きかったが、骨盤位、仮死、呼吸困難、けいれん等があり、2ヶ月間保育器に入ったが何度も重篤な状態に陥ったという既往歴がある。

第1子と第2子では一般に第1子がIQが高い傾向があるが差は僅少で、いわゆるバトン・タッチ現象という逆転をくりかえす。25人中9人が幼児期に言語発達のおくれを訴えられていた。

1人だけが未熟児のグループ24人の幼児後期IQは平均102, 学童後期IQ 116である。12歳時点で発達遅滞を示すものは5人で双生児の両方が遅滞を示すものが1

組と、1卵性で片方のみが障害を示す3人から成る。後者のうち2人は第1子として出生したが、周産期、新生児期に障害があり、発達遅滞の原因が推測され、脳波、CT所見もこれを裏付けるが、のこり1人については不一致の原因が不明である。5人の遅滞児のうち、2人は施設に入所、2人は特殊学級、1人は養護学級に通っている。正常な発達を示す19人のうち、8人は幼児前期に母親により言語発達遅滞を訴えられている。

異性双生児では、出生時に男児が第2子、未熟児で、成熟児である女児第1子よりも、幼児期までは身体・精神発達面で劣っていても、後に至っては女児より優位に立つ例が多い。

双胎の2人がともに成熟児であった22人についてみると、興味あることに自閉症児5人が含まれている。すなわち、定型的な自閉症状を示す一卵性双生児の一致例2組4人と、二卵性双生児の不一致1人である。そのほか一卵性双生児で精神発達遅滞一致の1組2人と、不一致の1人計3人も含まれる。これらの児童は幼児期には知能測定が不可能であったが、学童期以後には測定が可能になっている。測定可能な子どもを入れてみると、このグループの幼児後期IQ平均85, 学童後期平均105となる。自閉症児が入っているためか、幼児期に言語発達遅滞が訴えられたのは14人という多数であった。早期より治療的介入が行われたためか、障害児の殆どは普通学級に通っていた。

### 〔むすび〕

今回の報告例は少数なので結論はさしひかえるが、次の点が見出された。(1) 双生児全体としてみても、あるいは未熟児として生まれた双生児でも身長・体重は大部分は3歳～6歳までに平均に追いついている。(2) 知能発達も幼児後期(6歳)には平均発達を示すものが多く、年齢がすすむにつれてIQが高くなる傾向がある。(3) 発達障害を示した例は低体重出生ということだけでなく周産期障害によることが多い。(4) 発達障害は一卵性双

生児で一致、二卵性双生児では不一致のことが多いが、一卵性双生児でも推定しうる原因が認められず不一致の少数例が存在する。(5) 自閉症状を示す場合は一卵性双生児では一致、二卵性双生児では不一致であった。(6) 幼児後期、学童期に至って正常な発達を示す双生児も幼児期には言語発達遅滞を示すことから、双生児母親グループの如き早期のグループワークは意味がある。更に他の双生児の資料も分析して、発達の経過を考察してみたい

## 未熟児室出身児で被虐待児症候群と思われた1症例

日本大学小児科 馬 場 一 雄  
村 田 直

### 〔はじめに〕

かねてより、被虐待児症候群は、成熟児に比較して未熟児にその発生頻度が高いことが指摘されている。新生児医療が発展し、多くの未熟児が欠陥なき救命を遂げている現在、母子関係の破壊ともいえる被虐待児症候群において、未熟児室出身児の頻度が高いことは注目されねばならない問題である。今回、われわれは、未熟児室出身児で被虐待児症候群と思われる症例を経験したので報告し、被虐待児の中の未熟児室出身者についての検討を加えた。

### 〔症 例〕

症例は、昭和53年5月生れの3才の男児である。

#### 現病歴

昭和53年5月に、在胎34週、双胎の第1子として出生。出生体重2,100g。低出生体重と新生児メレナとの診断で、日大板橋病院未熟児室へ入院。日令41、体重2,700gで退院。以後、当院外来で7カ月まで経過観察。その間、体重増加不良と軽度の運動発達の遅滞を認めている。その後、当科外来を受診せず、連絡が途絶えていた。

昭和56年5月(3才時)

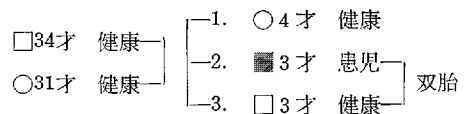
下痢が出現、母親はほとんど食餌を与えていなかった。なお、7カ月から3才までの経過は、わずかな流動食と少量の粥食が与えられていただけで、体重増加はほとんどみられていない。

昭和56年6月

意識障害と呼吸障害が出現、近医受診し、栄養失調症

と脱水症とのことで日大板橋病院小児科病棟へ搬送入院となる。

#### 家族歴



家族は5人家族で同居している。父親は会社員、経済状態は中流。両親の intelligence も、話の対応などからは特に劣っているとは思われず。同胞は4才の姉と、双胎の第2子である3才の弟がいるが、ともに成長、発育は正常。また、父方の実家は東北地方にあり、母親が健在であり、母方の実家は埼玉県で両親ともに健在。しかし、両親が育った家庭環境などについての詳細は不明である。

#### 既往歴

母親は患児の妊娠中には特に異常なし。患児は在胎34週、双胎の第1子として頭位分娩にて出生。仮死なし。出生体重は2,100g。身長は46cm。第2子の出生体重は2,560gである。日令2より吐血が出現し、同日、日大板橋病院未熟児病棟へ入院となる。入院後の経過は順調で、新生児メレナ、低出生体重児(AFD)、双胎の第1子との診断で、日令41、体重2,700gで退院する。その後、当科外来で経過観察されていた。5カ月までの成長発育は良好であったが、7カ月時の診断で、体重増加不良と軽度の運動発達の遅滞が認められている。以後、



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔まえがき〕

わが国では多胎〔複産〕児のうち、双胎(双生児)は分娩 1,000 について約 6.4 程度の割合で生まれ、その 84%は 2 人とも生産である。妊娠期間は単生児より短かく(第 10 月単生児 95.5% に対し 79.4%)、出生時体重も 2,000g 台が 70%、全体の 56.1%は未熟児(単生児 5.3%)といわれる。発達に関しては双生児は発達の上で 12 歳ではほぼ問題がなくなるという報告もある。われわれは昭和 41 年から千葉県の上野市(現千葉市)の双生児を長期間追跡してきたが、今回は身体・精神発達の面で、幼児期、学童期を通してどのような発達の状況を示すかを検討した。